

指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響

倉藤利早*1 田島 誠*2 米谷正造*2

1. 緒言

近年、人に指示されなければ行動せず、言われたことはきちんとするがそれ以上のことはしない子どもが多くなってきており、この現象は「指示待ち症候群」と呼ばれ、「指示待ち症候群」はまさに、自主性が欠けてきているあらわれである¹⁾。先行研究において、精神的に十分に成熟していない思春期から青年前期にあたる生徒は、精神的成長に周囲との人間関係が重要な意味をもっているとしている²⁾。そして、パーソナリティ形成の要因に環境的要因をあげ、家庭ついで学校、近隣社会などがパーソナリティに強く影響するとし³⁾、また、パーソナリティの形成はそれ自身独立的にあるのではなく、常に社会との関連において存在すると考えられている⁴⁾。思春期から青年期は中学生から大学生の時期にあたり、パーソナリティの形成時期であるこの時期においては家族や友人、教師の他に部活動における指導者もパーソナリティに影響していることが考えられる。このことから、学校において部活動に参加している生徒は、パーソナリティの形成に指導者からの影響もあると考えられる。

一方、スポーツ指導場面での指導者のリーダーシップについての先行研究において、「監督・コーチの型にはめた指導」、「個性を考慮しない指導」、「本人の希望や特徴を無視した指導」、「自分のものを押しつけ、選手を押しえつける指導」といった、指導者が威圧的なリーダーシップをとる場合、これらの指導は選手にとってマイナスに働き、反発する力が生まれるだけで本来の自主性を育成することは難しいだろうと述べている⁵⁾。また、指導者の「教え過ぎ」、「鍛え過ぎ」、「期待し過ぎ」、「結果のこだわり過ぎ」のような過度な教え過ぎや与え過ぎな指導行動が望ましくないという警告を与えた。そして、これらの指導は指示しなければ何をやっていいかわからないという「指示待ち症

候群」が生まれるとしている⁶⁾。

このように、指導者のリーダーシップのタイプにはさまざまなものが存在し、指導者のリーダーシップが選手のパーソナリティに影響している可能性が考えられる。特に、体育系の部活動において、指導者の「教えすぎ」、「結果にこだわり過ぎ」など、競技成績を重視した指導方法の場合は選手が自ら考えて行動する必要がないため、効率のよい行動を起こしやすいと考えられる半面、選手の自主的に行動する機会が減ると考えられる。また、指導者の「ただやればいい」、「楽しければ何でもいい」、「好きな事だけをやればいい」など、何も重視しない指導方法の場合は、選手がやりたい事を自由に行える機会が増えると考えられる半面、自主的に行動するのではなくただ好き勝手に行動する機会を増やすと考えられる。

しかし、先行研究において指導者のリーダーシップが選手の自主性に及ぼす影響について検討されたものはない。

そこで本研究では、運動部指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響を明らかにするために、指導者のリーダーシップをPM指導行動タイプ別に分け、選手の自主性への影響を比較・検討することを目的とした。

2. 方法

2.1 対象者

K大学の第1学年に対してアンケートを依頼した。さらに、このアンケートに参加することは自由であることを口頭と書面にて説明を行い、インフォームドコンセントを得られた773名を対象に行った。773名の回答者のうち有効回答数は634名(82.0%)であった。このうち、運動部に所属しており指導者から指導を受けた対象者、348名(平均年齢 18.3 ± 0.5 歳)を分析対象とした。

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療技術学研究科 健康体育学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 健康体育学科
(連絡先) 倉藤利早 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail : w6309001@kwmw.jp

2.2 調査時期及び場所

調査は、2009年6月から7月の間に、K大学の教室で実施した。

2.3 調査内容

2.3.1 自主性の尺度

自主性については自主性尺度⁷⁾を使用した。自主性尺度は20項目であり、表1に示した自己統制、独創性、自己主張、独立性、判断力、自発性の6つの因子で構成されている。回答は「当てはまらない」～「当てはまる」の5件法で求めた。項目は各1点～5点で集計し、100点満点として自主性尺度得点とした。

表1 自主性の構成因子 (井上ら, 2005)

因子	定義
自己統制	自己の欲望に一方的に支配されることなく、その支配から自己を適切に守ろうとする傾向。
独創性	他者とは異なったユニークな存在としての自己を追求すること。
自己主張	自己の価値が他者に認められようとする努力。自己の真の価値を実現しようとする客観的条件が整った場合重要な特性となる。
独立性	他者に不当な依存をすることなく、行動し生活すること。依存構造の発達として捉えられる。
判断力	自己が直面する事態を多方面から分析し、合理的な行動の仕方を見出して適切に対処していくこと。
自発性	他者によって強制された行動ではなく、自己自身の内的欲求に基づいて自発的に行動する傾向。

2.3.2 指導者の尺度

指導者についてはPM指導行動測定尺度⁸⁾を運動部活動における選手用に調査用紙を作成し、使用した。回答の際に、対象者に指導者の評価をする上で、評価対象の時期を統一させる必要があり、指導者との関わりが一番長い高校2年時の1年間を振り返り、回答するように口頭と書面で教示した。この尺度は「課題達成機能 (P機能: Performance function)」と「集団維持機能 (M機能: Maintenance function)」の2要素から構成されている。回答は「まったく当てはまらない」～「とても当てはまる」の5件法で求めた。P行動測定項目、M行動測定項目ごとに各項目を単純加算し、すべてのP得点とM得点の平均値を算出した。そして、個々のリーダーのP得点およびM得点とその平均値を上回っているか否かによって、リーダーシップのタイプをPMタイプ、Pタイプ、Mタイプ、pmタイプの4つに分類し、表2に示されるような、リーダーシップのタイプに設定した。本調査でのP得点とM得点 (平均値±標準偏差) は、P得点は28.6±6.6点、M得点は28.9±7.0点であった。

2.4 統計分析

指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響を検討するために、指導者のタイプご

表2 PM指導行動測定尺度タイプ

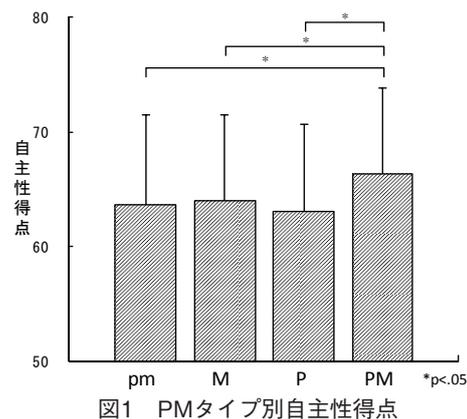
タイプ	定義
PM	競技成績と部内の関係維持のどちらも重視した指導者
P	部内の関係維持よりも競技成績を重視した指導者
M	競技成績よりも部内の関係維持を重視した指導者
pm	競技成績と部内の関係維持のどちらも重視しない指導者

とに対象者の自主性得点を1要因分散分析で行い、下位検定はFisherのPLSD検定を使用した。すべての統計学的有意水準を5%とした。

3. 結果

指導者のリーダーシップのタイプが選手の自主性に及ぼす影響を検討するために、指導者のリーダーシップのタイプごとに選手の自主性得点と自主性の各因子得点の平均得点を1要因分散分析で比較し図1, 2に示した。

図1の指導者のリーダーシップのタイプにより選手の自主性得点に有意な主効果が示され ($F(3,344)=3.777, p<.05$)、PMタイプが他のタイプと比べて有意に自主性得点が高く示された。



さらに、図2より、自主性因子の自己統制において、指導者のリーダーシップのタイプにより自己統制得点に有意な主効果は示されなかった ($F(3,344)=1.471, n.s.$)。また、自主性因子の独創性においても、指導者のリーダーシップのタイプにより独創性得点に有意な主効果は示されず ($F(3,344)=1.103, n.s.$)、自主性因子の自己主張においても、指導者のリーダーシップのタイプにより自己主張得点に有意な主効果は示されなかった ($F(3,344)=1.440, n.s.$)。

次に、自主性因子の判断力において、指導者のリーダーシップのタイプにより判断力得点に有意な主効果が示され ($F(3,344)=3.588, p<.05$)、PMタイプが他のタイプと比べて有意に判断力得点が高く示された。また、自主性因子の自発性においても、指導者のリーダーシップのタイプにより自発性得点に

有意な主効果が示され ($F(3,344)=6.313, p<.001$), PMタイプが他のタイプと比べて有意に自発性得点が高く示された。

また、自主性因子の独立性においては、指導者のリーダーシップのタイプによる独立性得点に有意な主効果が示され ($F(3,344)=2.766, p<.05$), pmタイプが他のタイプと比べて有意に独立性得点が高く示された。

以上の結果より、指導者のリーダーシップのタイプにより選手の自主性得点に有意な主効果が示され、PMタイプがPタイプ、Mタイプ、pmタイプよりも自主性得点が高いと示された。さらに、リーダーシップのタイプにより選手の判断力得点、自発性得点にも有意な主効果が示され、PMタイプがPタイプ、Mタイプ、pmタイプよりも判断力得点、自発性得点が高いと示された。また、指導者のリーダーシップのタイプにより選手の独立性得点に有意な主効果が示され、pmタイプがPMタイプ、Pタイプ、Mタイプよりも独立性得点が高いと示された。

4. 考察

本研究の結果から、PMタイプの指導者が選手の自主性および判断力、自発性を向上させる可能性が考えられる。先行研究において、リーダーシップP行動を集団目標達成機能を促進するリーダーシップ、リーダーシップM行動を集団維持機能を促進す

るリーダーシップとし⁹⁾、また、リーダーシップP行動は組織・集団の目標達成、課題解決に力点を置くリーダーシップ行動であり、リーダーシップM行動は組織・集団のまとまり・和、人間関係の維持に力点を置くリーダーシップ行動としている¹⁰⁾。このことから、PMタイプの指導者は、競技成績と部内の関係維持のどちらも重視するため、チームや選手の競技成績を上げるような、技術・プレー面においての指導を行い、かつチームの良好な人間関係を築き、チームをまとめるために積極的にコミュニケーションをとるような指導を行う。PMタイプが自主性得点および判断力得点、自発性得点において、Pタイプ、Mタイプ、pmタイプよりも有意に高く示されたのは、選手が競技成績の向上を目指し、かつチームの人間関係が良好なものになるように、自分や自分の所属している部活動に必要な事を自主的に考え判断し、合理的に行動するようになり、必要と考える条件を自分の力で自発的に解決しようとするためと考えられる。また、pmタイプの指導者はP機能に関する指導もM機能に関する指導も少ないため、選手は周囲に依存することなく自ら行動することで独立性が高くなったと考えることができる。

5. まとめ

指導者のリーダーシップのタイプにより選手の自主性得点に違いが示され、指導者のリーダーシップのタイプをPMタイプと判断した選手の自主性得点

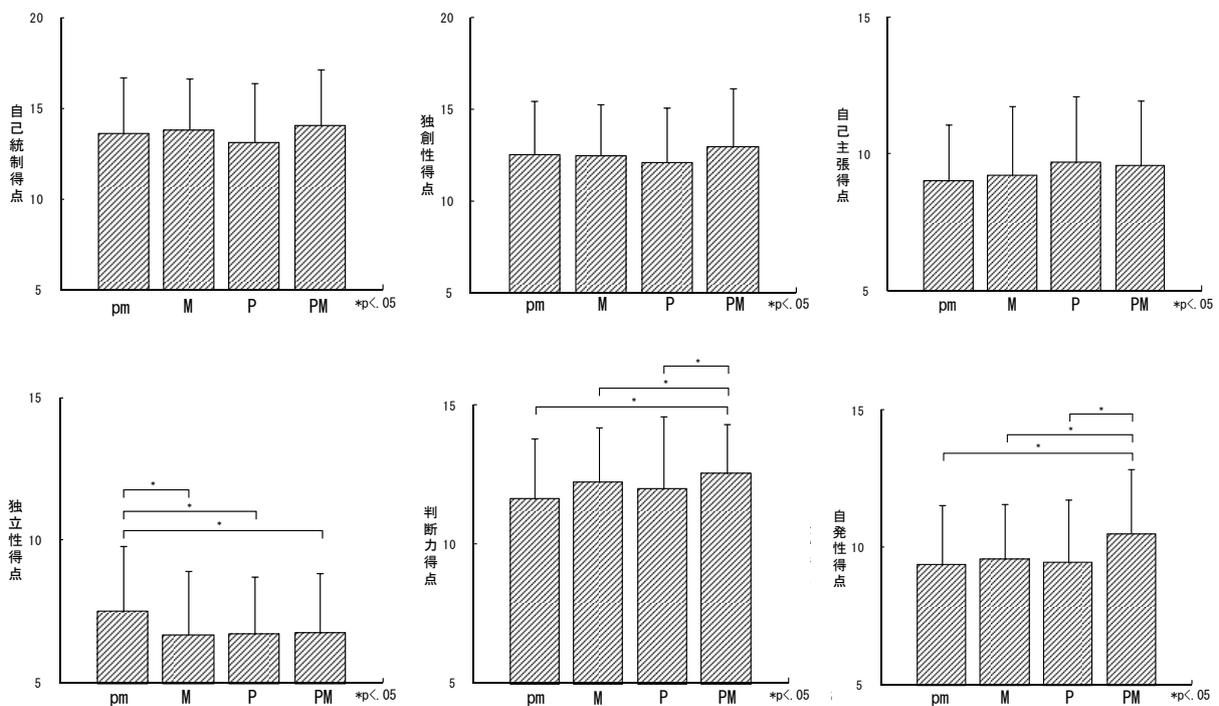


図2 PMタイプ別自主性因子得点

や判断力得点、自発性得点が他のタイプよりも有意に高く示された。また、指導者のリーダーシップのタイプをpmタイプと判断した選手の独立性得点が他のタイプよりも有意に高く示された。このこと

から、PMタイプのリーダーシップが選手の自主性や、特に判断力、自発性を向上させる可能性が考えられ、pmタイプのリーダーシップが選手の独立性を向上させる可能性が示唆された。

文 献

- 1) 石井源信：ジュニアスポーツの現状と課題—心理学的観点からみたジュニアスポーツのありかた—。ゴルフの科学, **12**(1), 23-28, 1999.
- 2) 石井源信, 石川国広, 高見和至, 後藤肇：ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究（第3報）。平成7年度日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告, 日本体育協会, 3-24, 1996.
- 3) 鈴木清：パーソナリティ形成の過程。体育の科学, **14**(9), 495-498, 1964.
- 4) 松井三雄：スポーツマンのパーソナリティについて。体育の科学, **14**(9), 503-506, 1964.
- 5) 石井源信：12章 スポーツと集団力学—スポーツ集団におけるグループダイナミクス—。杉原隆, 船越正康, 工藤孝幾, 中込四郎編, スポーツ心理学の世界, 福村出版, 東京, 165-181, 2007.
- 6) 石井源信：コーチングの最新心理学。体育の科学, **57**(2), 84-90, 2007.
- 7) 井上史子, 沖裕貴, 林徳治：中学校における自主性尺度項目の開発。教育情報研究, **21**(3), 13-20, 2005.
- 8) 三隅二不二：PM指導行動測定尺度。吉田富二雄編（堀洋道監修）, 心理測定尺度集Ⅱ 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉, サイエンス社, 東京, 250-259, 2001.
- 9) 三隅二不二, 矢守克也：中学校における学級担任教師のリーダーシップ行動測定尺度の作成その妥当性に関する研究。教育心理学研究, **37**(1), 46-54, 1989.
- 10) 関文恭, 三隅二不二, 矢守克也, 大黒良明, 三角恵美子：いわゆる新人類の労働価値観と上司のリーダーシップに関する実証的研究。九州大学医療技術短期大学部紀要, **17**, 47-55, 1990.

(平成22年10月23日受理)

The Effects of Leadership by Athletic Club Coaches on the Independence of Their Players

Risa KURATO, Makoto TAJIMA and Shozo YONETANI

(Accepted Oct. 23, 2010)

Key words : independence, leadership, PM leadership action scale

Correspondence to : Risa KURATO

Master's Program in Health and Sports Science Graduate School of
Health Science and Technology, Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan

E-Mail : w6309001@kwmw.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.20, No.2, 2011 457-460)